



## 現代の外来生物の問題について考える

公益財団法人日本植物調節剤 評議員  
 バイエル クロップサイエンス株式会社 開発本部長  
 渡辺 賢

今年の晩夏のとある日に外に出て隣家の駐車スペースを見ていると、広葉の植物がマット状に広がり、小さなピンク色の花を大量に咲かせていた。見るからに帰化植物であろうと思ひ、自宅に帰り調べてみると予想通り「ヒメツルソバ」というヒマラヤ地方やインド北部原産の帰化植物であるという。これがきっかけとなり、植物だけではなく海外から渡来した生物について少し考えてみることにした。

帰化植物の代表格といえば、セイタカアワダチソウやヒメジョオン、ハルジオンなどといった北米原産の荒地地などでおなじみのキク科の植物であろう。これらはすでに日本では普遍的な存在で、その旺盛な繁殖力で農業生産場面でもしばし問題となる。他にも多くの帰化植物が生産者を悩ませており、日本古来の栽培環境である水田においてさえもアメリカセンダングサやアメリカアゼナといった種が防除対象となっているのが現状である。近年では、「地球上で最悪の侵略的植物」の異名を持つ南米原産のヒユ科植物である、ナガエツルノゲイトウによる農業水利施設における被害が報告されている。

一方病害については、世界的に比較的普遍的な種が多く、その種の生育に即した環境であればあまり地域性がみられないことが一般的なようだ。一部、りんごやなしの火傷病のように、世界各地ではその被害が大きな問題となっている一方で、日本の徹底した植物検疫システムの恩恵により、国内における蔓延を抑えている例もある。ところがここ数年で問題となっているのは、かんしょの基腐病という元来北米やアフリカなどで問題となっていた病害である。3年ほど前に日本に侵入するやいなや、数年でほぼ全国に広がり産地維持を脅かす存在となっていることは皆さんもご存知であると思う。

虫害は雑草害とならび外来種が農業場面で大きな問題となる分野で、水田のイネミズゾウムシは今では防除が欠かせない重要害虫の一つであるし、街路樹を時に丸坊主にしてしまうアメリカシロヒトリを知らぬ人はいるまい。タバココナジラミやミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマに

ついてはその食害のみならず、ウイルスを媒介する宿主としてもその経済的被害は大きいといえる。

ところが近年、明らかに新たに日本に渡来し定着する外来生物の数が増えたように感じている。もともと外来生物が劇的に増え始めたのは、明治時代以降に海外との貿易が盛んとなり、物流と共に移入したことが一つの大きな理由である。従って、数十年前までは北米からの移入種がその大多数を占めていた。ところが2000年を過ぎたころからであろうか、北米以外の国からの移入種が増えたように感じる。近年では、我々が手にする日用品や衣類、食料品はコスト削減の目的で生産拠点や輸入元がアジア諸国に移行している。これはつまり、これらの国から外来種が移入する機会が増えていることに他ならない。また同時に、温暖化に伴ってかつてならば移入しても越冬できなかった種が、生存可能となり拡散している例もあるのではないだろうか。興味深い一例では、10年ほど前、関東のとある地域の竹林で聞きなれない鳴き声のセミが大合唱していることが報告された。中国原産の「タケオオツクツク」というそのセミは、中国から輸入した竹ぼうきに産卵された卵が繁殖源となり拡散したという。

外来種の問題は必ず人間の何かしらの活動が引き金となっている。新たな外来種が農業場面で重要な防除対象となることも少なくなく、農業メーカーは新たな病害虫雑草を効率よく防除できる薬剤の開発の必要に迫られる。いつも思うことだが、他国から移入した生物は気の毒である。本来であれば元来分布していた場所で、生態系のもと絶妙なバランスに保たれていた個体群が、異国では天敵不在などの理由から「外来種」として扱われ駆除の対象となる。国際的に持続可能な開発目標が掲げられる中、人間の活動が原因となっている外来種問題については、「駆除」という対症療法だけでなくその原因となる人間の活動そのものに着手することがより重要ではないだろうか。